
ムジークタウン

四季 華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムジークタウン

【Nコード】

N3463U

【作者名】

四季 華

【あらすじ】

「みんなの.jp」というコミュニティサイトにて「ココロオト」というタイトルで発表した小説に加筆したものです。

ただの学生である詞音が、ムジークタウンという街で音楽を通して人とふれあっていくお話。

ただ漠然と好きだった音楽に心を動かされ、今度は自分が心を動かしたいと思いながら、詞音はカホンを叩く。

幸せがたくさん詰まったほのぼの小説。

「あれ！？ ウソ、ヤバイ！」

最寄り駅のホームで、わたしは1人でパニックに陥っていた。

周りの人達は私を一瞥してそのまま横を通り過ぎていく。

「どうしよう・・・マジでない」

私は高校を卒業したばかりで、今は春休み。大学の課題はあるけれど、それをやる気にもならないし、せつかくの休みだから遊びたいという気持ちが強くて、外に出た。

しかしいざどこかに行こうと思うと、目的地が特に思い当たらない。みんなはそれこそ大学の課題に追われているし、就職組は研修中だ。つまり私は今日、とても暇なのであり、行くあてを失くしていた。せつかくだから電車でも使つてどこかへ行こうと思つたけど、電車を使つて行けるところといえつゝこの間卒業したばかりの高校くらいだ。

でもお世話になった先生たちに改めてお礼も言いたいし、部活に勤しむ後輩たちの顔も見つつ遊びに行こうと思い、駅までやってきた。

そして何より、どこか街へ繰り出すには、私のTシャツにパーカーにジーンズといった格好はみすばらしかったし、化粧もしていない貧相な顔立ちでは行きたくてもいけない。

というわけで、私は高校へ行くことにした。2つ先の駅が目的地だから、その分の料金の切符を買った。定期は残念ながら切れている。

定期のカードでない普通の切符を手にするのは久々だったから、私は少し浮かれた気持ちで電車を待っていた。

電車が来るまでにあまり時間はかからないし、どうせ2つしか進まないのだから切符はポケットに突っ込んでおけばいいだろうと思いい、パーカーのポケットにしまった。そのまま駅の階段を上り、ホ

ームの黄色い線の内側で行儀良く待っていた。そして一応確認のためにポケットを探ったら、手には何も触れなかった。

逆のポケットに入れたかと思い、左も探してみたが何もない。もう一度、切符を入れたはずの右ポケットに手を入れる。しかし、やはり何もない。

切符をなくしてしまった。

一度階段を下り、地面を見つめながら探すという手もある。駅員さんに言って、新しく切符を発行してもらうこともできる。

しかし私は、一気に疲れた気分になって、もう電車に乗る気すら失せてしまった。

元々、暇だったからという理由で突発的に動いただけだし、どうしても行かなければならない理由なんてどこを見渡したってない。

それならば、わざわざ何もない高校のある町に行くよりは、ここで引き返して家で漫画でも読んでいた方が楽しいだろう。

一回ホームに入ってしまった以上、出るには多少お金がかかるけど、それはこの際気にしない。

「・・・帰る」

踵を返そうと半身を傾けると、背中に声が掛かった。

「お姉さん、ちょっと」

振り返ると、とても身なりの整った、清潔感を具現化したような中年のおばさんが困ったように、それでいて微笑みながら立っていた。

念のため周りを見渡してみても、「お姉さん」と呼べるのは私一人しかないない。

「私？」

自分を指差して訪ねると、彼女は静かに頷いた。もしかして私の切符を拾ってくれたのだろうか。

「何か？」

「あなた、切符をなくしたでしょう？」

とても透き通った声の人だなあ、と感じながら私は「はい」と答えた。

「残念ながらあなたの切符を見つけたわけではないけれど、代わりにこれはいかが？」

そう言っただけで彼女が差し出したのは一枚の切符だった。その切符には、1100円とだけ書かれていた。

普通の切符ではない。サイズも少し大きめだし、日付もなし、駅の名前もなしの値段だけ書かれた切符を見たのは初めてだ。

「何ですか？ この切符」

「これはね、私が使う予定だったのだけど、ちょっと理由があって行けなくなってしまったの。だから、あなたにあげる。1番線で次に来る電車に乗って。必ず1番後ろの車両に。そうすれば、今日1日暇が潰せるから」

彼女は私の手に切符を握らせて、その場を足早に去った。あの人は何だったのだろうか。普通に考えればかなり怪しい。こんな切符はゴミ箱に捨てて、さっさと改札に向かうべきだ。

しかし、私はどうしてもそれができなかった。1日暇が潰せるのなら、このままその電車に乗ってしまった方が楽しそうだ。そこで何が起ころうと、私は構わない。そんな気分だった。

私は2番線から1番線に移り、電車を待った。1番後ろの車両に乗るんだよね。

まもなくやって来た電車の1番後ろの車両に乗り込んで、隅の席に座る。他にも何人か座った。

少しして出発した電車の揺れがとても心地よくて、私はいつの間にか眠ってしまった。

ハッと目が覚めて、ここはどこだろうと辺りを見回すと、先程とは違う風景が目映った。

私がつっていた高校とは逆の方向だし、こっちの方なんて全然行かないから、この方面の風景に不慣れなのは当たり前だ。けど、それ以前の問題があった。

進行方向に、列車が1両もないのだ。後ろを向いても、景色が広がるだけ。いつの間にかこの1車両だけになっている。周りの人は、同じ駅で乗った人もいれば、そうでない人もいた。共通しているのは、皆なんてことない表情で乗っていること。当たり前のことだと言わんばかりに外を見たり読書をしたり。どこかの駅で車両が離れたのだろうか。

「次は1100円。1100円」

アナウンスが響いた。駅名を告げるみたいに金額を告げる。その金額はこの切符に書かれているものと一緒だ。ここで降りればいいのだろう。

降りた駅は閑散としていて、田舎の無人駅を想像させた。ここがどこか見当もつかないから、本当に田舎の無人駅かもしれない。

改札はなかった。ただ、腰くらいまである木の板が扉の体を成して、出入り口代わりになっている。

「切符を拝見」

私は驚きで飛び上がりそうになった。無人だと思っていた駅窓口から人が現れた。いや、最初からそこにいたのだけど。

「お客さん、ここは初めて？」

「はい」

「どうやってこの切符を？」

「北山駅で知らないおばさんにもらいました」

「よく来る気になったな。相当な物好きらしい」

「でしょうね。自覚あるもん」

「ここがどういう所か知ってるか？」

「全く」

「なら、さっさと駅から出るといい。きつとあんななら楽しめるだ

ろう。グッドラック」

「どうも」

何がどうなっているのかさっぱり分からないが、分からないということを気にしなければ、楽しいであろうということが伺える。なら楽しもう。私は元来踏み切りのいい人間なのだ。

私は未知なる世界に踏み出すような気持ちで、しかし軽やかに一歩を踏み出した。

駅を出ると、まず大きな看板があった。この街の案内図らしい。それを見ると、右の方角に行くと町の広場。左に行くと市場。上へ行くと教会（宗教や宗派は分からない）、下は言うまでもなく駅だ。東西南北は書かれていないし、ここがどこなのかもわからない。ただ一つ言えることは、全体的にとっても小さい町らしい。

私は少し思案した結果、右にある広場へ行くことにした。まずはどんな町か見てみたい。

少し歩くと、数人の人とすれ違った。彼らはみんな19世紀のイギリス人のような恰好をしていて、21世紀の日本とはどこかかけ離れた存在感を醸し出していた。私の服がとても浮いているように見える。タイムスリップでもしてしまったのだろうか。

なんてことを考えていたら、耳に軽快な音楽が聞こえてきた。まるでこの音楽の前でピエロが玉乗りをしているかのような軽快さだ。

足は知らず知らずの内に動きを速くしていた。音楽に心が惹き付けられる。

通りが開け、広場に出た。真ん中に噴水があつて、その周りに旅芸人のような音楽隊がいた。

広場はサッカー場を正方形にしたくらいの大ささだった。その真ん中に、サグラダファミリアのような装飾をあしらった噴水があるという感じ。

音楽隊の演奏には、曲はあつたが、歌詞はなかった。音だけだ。しかし、言葉がなくても彼らの言いたいことや伝えたいことは何故

だかしつかりと伝わってきた。

彼らは全部で12人。3人がバイオリン、1人がチェロ、3人がギター、1人がアコーディオン、1人が太鼓、1人がフルート、2人がトランペットという構成だった。男も女もいる。

あまり見ない編成だけど、皆楽しそうに笑顔で踊りながら音を奏でる。彼らの周りにはまばらに壁ができていて、その演奏を楽しむ人達もまた笑顔で踊っていた。

心なしか気分がワクワクしてきて、私まで踊りだしそうになった。しかし、踊る相手がいない初めての町で踊る勇気はなかった。だから足でリズムを取りつつ体を揺らす。

1曲終わって彼らが挨拶を終えると、周りからは歓声や指笛が送られた。

「ではまた1時間後に」

バイオリンを弾いていた男性が紳士的にお辞儀をして終了を伝えた。

すると、また街のどこからか音楽が聞こえてきて、今まで踊っていた人たちは、今度はその音楽がする方へと足を向けていった。その足取りはまるで、さっきの私のように軽やかだった。そして私だけがその流れに乗れず、取り残される。

「おや、お姉さんは見ない人だね」

そのバイオリンの優しそうなリーダーが私に向かって話し掛けた。おじさんは口の上に生えた長めの白いひげを優雅に揺らして、会釈した。外見で判断することを許されるならば、五十代くらいに見える。短めのシルクハットにタキシードを着て、これでステッキを持っているたらイギリスの夜会に出席する人みたいだ。

「あ、はじめまして」

「こんにちは。そんな所に立っていないで、こちらに来て座ったらどうです？」

彼は噴水の周りにあるベンチの1つを指差して言った。確かに足

は少し疲れているから座りたい気分だった。

私は素直にそちらへ歩いて行って、バイオリンの調整をするおじさんの近くに腰を下ろした。

「ここに来たのは初めてだね？」

「はい。知らないおばさんに切符をもらって、成り行きで来ました」

「そうですか。では、この町も、他の町も知らないんですね」

「ええ。ここはなんていう町ですか？そもそも、他の町って・・・？」

「説明しましょう」

彼はにこやかに笑って、バイオリンを一度ケースへしまった。

「この町の名前はムジークタウン。この町の人みんな音楽が大好きです。私たち音楽隊はこの町の住人で、日に何回も演奏します。時には朝、鶏の鳴き声の代わりに楽器を鳴らしますし、夜遅く、子守唄の代わりに弦を震わせることもあります」

とにかく音楽が好きで、この街の名前がムジークタウンだということはわかった。だけどそれにしてもわからないことが多すぎる。私が顔にクエスチョンマークを浮かべていると、バイオリンのおじさんは優しくその続きを話し出した。

「そして、この町の人が奏でる音楽には、言葉が存在しません。まるで遠い昔の人のように、音で意思を伝達するのです。それがこの町の決まりです」

「あなた達はこの町の住人なの？」

「そうです。私達のようにここに住んでいる者もいれば、あなたのように外界からやってくる人間もいます」

「成程。他の町ってというのは？」

「先程も説明しましたが、ここはムジークタウン。他にも幾つかの町があります。例えばブーフタウン。これは本の町。本が大好きな人達が集まる場所で、どんな本でも手に入ります。最新刊から最古の本まで。小説はもちろん、戯曲集や学問の専門書まで、何でもです。ここには本を書く作家さんたちもいて、彼らが書く本も素晴ら

しいものです。後は、フィルムタウン。ここには映画好きな人が集まります。自分達で撮影したり、鑑賞したりします。本当に泣ける映画も、お腹を抱えて笑ってしまうコメディも、どんな種類の映画も作れますし、鑑賞することができます。それと、マッヘンタウンというのもあります。これは何かを作るのが好きな人が集まる場所で、ブックスタンドから家まで作ってしまいます。人によっては模型だったり、料理だったりします。そんな多種多様な町がこの世界にはあります。この世界のことを、私達は『ナイン・レアリティー・ヴェルト』と呼んでいます。略して『ヴェルト』と呼ぶのが私たちの中では一般的ですけどね」

そこまで説明されて、私はある程度納得した。要約すると、私は今日1日ここで音楽を好きなだけ聴いて過ごせるらしい。音楽は詳しくないが、好きだから結構楽しいかもしれない。

「どうです？ 楽しめそうですか？」

「はい。とっても」

「それは良かった」

おじさんは輝くような、けれどもどこか安心できる包容力のある笑顔で心から喜んでくれた。

「ねえ、さっきの曲のタイトルは？」

「タイトルはないんです。さっきも言ったように、音楽は娯楽であり生き甲斐であり、そして意思の伝達手段。言葉を喋るときにそれらを統括してわざわざタイトルなんてつけないでしょう？ それと一緒です。尤も、全部についていないわけではない。曲としての音楽にはタイトルがつく。しかし言葉としての音楽にはつかない。そんな所です」

私がひとしきり納得していると、楽器の調整を終えた他のメンバーが私の周りに集まり始めた。

「あれ、初めましてですね？ 僕はヴィオ。君は？」

その内の一人で、バイオリンを持っている若い二十歳くらいの男

性が話し掛けてきた。短めの茶色い髪に嫌らしさのない表情という爽やかな外見と柔和な雰囲気がとても好青年に見える。背が高くてすらりとした体型だからモデルに見えなくもない。

「初めまして。私はコトネ」

「コトネさん。どういう字？」

「『歌詞』の『詞』に『音』で『詞音』」

「ムジークタウンにぴったりの名前だ」

時々「しおん」とも読まれる私の名前。目の前の彼はヴィオさんと言ったよね。見た目純血の日本人なのだけど、以外にハーフだったりするのだろうか？

「ヴィオさんはカタカナ表記ですよね？」

「そう。ああ、僕は日本人だよ。けれど、ムジークタウンの皆の名前は楽器の名前に由来しているんだ。だから自然にカタカナ表記が多くなる」

「ふうん。ヴィオさんはバイオリンを弾くから英語の最初3文字を取ってヴィオ？」

すると、ヴィオさんは困ったように苦笑いして、頬を人差し指で掻いた。

「ううんと、僕はバイオリニストじゃないんだ。これはビオラって言って、バイオリンよりも少し大きいんだ。音も違う。最初の3文字を取ってるっていうのはその通り」

「へえ・・・ビオラ。初めて聞きました」

「クラシックを聴かない人にはあまり馴染みがないかもね。オーケストラで真ん中から向かって斜め右くらいにすることが多いかな。

チェロの左側だ」

「オーケストラはあまり分かりませんね」

「君くらいの年なら、そうかな」

けれどヴィオさんは嫌な顔はせず、にこやかに笑っていた。やはり好青年。

「おじさんは団長ですか？」

「その通り。私はロン。フランス語でバイオリンのことをヴィオロンと言いますから。そして、あそこにいる女性がもう1人のバイオリンで、名前はリノ。由来は、イタリア語でバイオリンのことをヴィオリノと言うからです」

ロンさんは斜め右を示して、アコーディオンの男性と楽しそうに喋っている女性を紹介した。

つまり、私が思っていたバイオリン3人は、実はバイオリン2人のビオラ1人だったのだ。

「団長、その子、誰です？」

今度は左側から私と大して年が変わらなそうな女性が2人現れた。確かトランペットの2人組みだ。右側は快活そうな背の高い人で、長い黒髪に大きな瞳がよく似合って、きれいな大人の女性を思わせる。一方左側の人は背が低くて、カールさせた短めの茶色い髪がかわいくて、顔も少し幼めに見える。かわいい女の子という感じがする。一方左側の人は背が低くて、カールさせた短めの茶色い髪がかわいくて、顔も少し幼めに見える。かわいい女の子という感じがする。

「この子は今日偶然ここに来たコトネさんだ。紹介しよう。右がトランペットのトロンと、左がホルネットのルネッタ」

「初めまして。お2人ともトランペットだと思ってました・・・」

またしても勘違い。ホルネットという楽器も初めて聞いた。トランペット1人の、ホルネット1人。訂正完了。

「初めまして、コトネちゃん。ホルネットは管楽器をやっている人なら勿論知っているけれど、トランペットほどメジャーな楽器じゃないから。気にしないで」

「トランペットは誰でも知ってるからね。ラッパの形してればとりあえずトランペットっていう気持ちも分かるよ。まあ、大事なのは知識じゃなくてその音を聴いてどう思うかだから。気にしない気にしない」

ルネッタさんに優しく励まされたあと、トロンさんにも元気付けられた。

「あの太鼓にも名前があるんですか？」

私は金髪のお兄さんが叩いていた太鼓を指差して言った。

「あれはスネアドラム。ドラマーから見てドラムセットの左側にあるやつだよ。小太鼓って言ったら一般的？ちなみにあの人はスネアさん。名前に捻りがないのはあの人くらいだよ。悪戯好きな人でね、よく私たちを笑わせてくれるの」

トロンさんが邪気のない笑いを浮かべながら、太鼓と奏者の説明をしてくれた。

「よく分かりました」

「あと知らない楽器はある？」

「多分ないと思います。あれはアコースティックギターですよね？」
私はスネアさんと談笑している3人の若い男性が持っている楽器のことを尋ねた。私が聴くのはロックやポップスだから、アコースティックギターとエレキギターがあるのは知っている。あれはアコースティックギターに属するはずだ。

「そう、あれはアコースティックギター。でもね、3本ともじゃないよ」

「えっ、そうなんですか？」

「うん。あの1番右にいるお兄さんが持つてる楽器。あれはアコースティックベースって言って、マイナーと言えばそうかもね。みんながバンドでよく見るベースはエレキベースで、ギターにアコースティックとエレクトリックがあるように、ベースにもアコースティックがあるの。ちょっと遠いから見えにくいかもしれないけど、ギターよりも大きいよ。そこはエレキのギターもベースも一緒だね」

「へえー・・・」

私は驚きと興奮が混じった目でそのベースを見た。ベースと言えどバンド等で使われるエレキギターと似たようなベースしか知らなかった。

「間違ってもあのお兄さんに『ギターとベースってどう違うんですか？』なんて聞いちゃダメだよ」

「どうしてですか？」

「熱弁をふるい出すから。ギターとベースは全然違うんだぞーって」

トロンさんがおかしいように笑いながら説明してくれる。過去にベースのお兄さんが熱弁をふるったことがあって、そのときのことを思い出しているのかもしれない。

「そうそう、ちなみに、あとの2人が持つてる楽器も微妙に違うんだよ」

笑うのをやめて、トロンさんはもう一度ギターの2人を見た。

「違うようには見えませんが・・・」

「でしょ。でもね、左側のお兄さんが持つてるのが、フォークギター。右側のお兄さんが持つてるのが、ガットギター。フォークギターは聞いたことあるかな」

「はい。フォークソングとかって言葉も聞いたことがあります」

「大きな違いは弦の種類。フォークは全部スチール弦だけど、ガットは1から3弦がナイロンでできているの。他にも細かい所で色々違うんだけど、大雑把に言えばそんなところ」

「勉強になりました。よくそんなに知ってますね。だってトロンさんはトランペッターですよ？」

そう言うと、トロンさんだけでなくロン団長もヴィオさんもルネッタさんも楽しそうに笑い出した。

「忘れたの？ここはミュージックタウン。音楽を愛して止まない人達が集まる場所だよ。みんな音楽のことになると熱心に耳を傾けて、音で語り合う。確かに私はトランペッターだけど、演奏できるのはトランペットだけじゃない。他の金管楽器・・・例えば、ホルンやチューバだってできるし、木管楽器のフルートやサクソスもできる。弦楽器ならチェロ、打楽器ならコンガだって齧ってる。他のみんなだって似たようなもの。ロン団長なんて全部の楽器を弾くことができるんだから」

その言葉に私は目を瞠った。全部の楽器？オーケストラで使われている幾種類もの楽器だけでなく、金管バンドやロックのバンド演奏に使われるものまで網羅しているということだろうか。

「トロン、それは言い過ぎだよ。私は確かに幾つもの楽器を演奏で

きるが、全部じゃない。この世には楽器なんて数え切れないほどあるのだから。私たちの知っているものなんてほんの一部だ。みんなが知っているような楽器なら演奏できるかもしれないが、民族楽器というものもたくさんある。存在さえ知らない楽器だってあるさ」

ロンさんは謙虚にそういった。そうか、楽器というとバンドか吹奏楽部が持っているものとかに目が行きがちだが、民族楽器というものだってあるのだ。それらを考えたらそれこそいちいち数えてはいられないだろう。

「コトネさん、何か楽器をやっていますか？」

「小学校のときにリコーダーを吹いたくらいですよ。楽器は憧れですから」

「そうですか。・・・！いいことを思いつきました」

ロンさんがとても満足そうに笑って私を見た。その顔にはうきうきとした色がはつきりと見えた。

「コトネさん、次のステージで私たちと一緒に演奏しましょう！」

一瞬思考回路が停止した。なんとか再び頭を回転させる。

私が、この楽団の皆さんと、一緒に、残り1時間もない次のステージで、演奏をする。

「いやいや！それは無理でしょう！」

「何故です？」

「今さっきも言いましたけど、私楽器なんてリコーダーがいいところですって！もうリコーダーだってまともに吹けるかわからないのに！」

私は精一杯の抗議をした。彼らは私に恥をかかせる気か？

「そんな心配はご無用。何度も言うように、私たちにとって音楽は伝えたいことを伝えるための手段です。喜びを伝えたかったらそれを音に乗せ、悲しみを伝えたかったらそれを音に乗せればいい。音に乗せるのは簡単です。心からその楽器を演奏すればいい。いえ、演奏しなくても、音を出せばいいのです。音は嘘を吐かない。心がそのまま音になります。私たちはそれを『ココロオト』と呼んでい

ます。ココロオトは誰にだって出せます。楽器と言いましたが、本当は何を使っても出せます。コトネさん、あなたはさっき体を揺らして聴いてくれていた。他の方達も踊りながら笑いながら聴いてくれた。ココロオトが伝わった証拠です。今度はあなたが、伝えてみませんか？」

心が揺らいだ。私は音楽なんて専ら聴く専門で、自分がライブハウスでカッコよくギターを弾いている夢、基、妄想を膨らませたこともあるけれど、結局は何もしていない。ここで数年ぶりにリコーダーを持ち出してみすばらしい演奏を披露し、笑顔ではない種類の笑いに晒されるかもしれない。

それでも、今度は私があの手顔を引き出せたら・・・と思うと、心が震え、奮えた。あの人達を踊りに誘うココロオトを出すことができたなら、どれだけ幸せな気持ちになれるだろう。

「コトネさん、あなたはリコーダーに自信がありませんそうですね。ならば、打楽器はどうです？」

ロンさんが思案する私に声をかけた。打楽器？打楽器の経験なんて小学校低学年のカスタネットかトライアングルくらいしかない。

「打楽器？」

「ヴィオ君、悪いが、荷台の中からカホンを1つ出してきてくれな
いか」

「わかりました。行つてきます」

ロンさんはヴィオさんに鍵を渡した。彼が小走りで行く先には、中型トラックがあつた。あれで楽器や道具を運ぶのだろう。

彼は荷台の中に入り、少しして箱を抱えて出てきた。そしてそれを私の前に置く。木の箱だ。

「何です、これ？」

「これがカホン。真正正銘の打楽器ですよ」

「これが楽器！？ 木の箱か椅子にしか見えません」

「こつちを見ればわかります。ほら」

ロンさんは180度箱を回転させた。すると、そこには穴があつ

た。アコースティックギターのボディに開いているような穴が。

「これはサウンドホール。これでただの箱ではないことがわかるでしょう？」

「でも私、こんな楽器今日初めて見ましたし、演奏の仕方なんて全然知りませんよ」

「演奏の仕方なんて知らなくても構いません。細かいところまで話していったら、日が暮れて朝日が出てしまいます。プロの方々の演奏は、それはそれは素晴らしいものですが、なにもそこまでやらなくてもいい。飽く迄、ココロオトを出すのです。ヴィオ君、少しだけ叩き方を教えてあげて」

「わかりました」

ヴィオさんはまず、穴が開いている方を後ろにしてその箱に跨った。そして腕まくりをする。

「この真ん中辺りを叩くんのだ。すると、低い音がする」

彼は実際にやってみせた。確かに「ドン」というような低くて太い音がした。

「端の方を叩くと、クローズドハイハットと言って、ハイハットシンバルを閉めて叩いたときのような音がする」

ハイハットシンバルだけは知っていた。ドラムセットの、向かって1番右にある2枚で1つの小さめのシンバルだ。ドラマーからすると1番左にあつて、スティックで叩いたりペダルを使って開閉して音を出したりする。

「そして、端を平手で叩くと、スネアドラムのような音が出る。この3つさえ覚えれば、後はどう叩こうが君の自由だ。やってみる？」

私は頷いた。一応つい先日まで女子高生で、もう少ししたら女子大生になる人間が足を広げて楽器に跨るなんて本人にしてみれば少し恥ずかしいが、今はそれ以上にこの楽器への好奇心が溢れている。私はひとつひとつ音を出していった。その内それぞれを組み合わせて音を出し、手が痛いのを気にしないようにしながら叩いた。

「いいですね。あなたは今、とても楽しんでいますね。その力ホン

という楽器を演奏することに。そして、自分が音を出すということに。とても幸せを感じて、心が満たされている」

ロン団長は満足そうにそう言った。

「わかるんですか？」

「わかりますとも。伝わってきましたからね。あなたのココロオトが」

私は後ろにある噴水に突き上げられたような気持ちになった。これが、ココロオトが伝わるということ。これは感動なのか幸福なのか、とにかく嬉しいと感じた。噴水の水が全部私の気持ちになっているかのようだった。

「私たちと、演奏しますね？」

「はい」

私ははつきりときっぱりと言った。

午後4時の公演が間もなく始まるうとしていた。私は適度な緊張と、ココロオトを届けたい疼きでいっぱいだった。

「お集まりの皆様、ようこそいらっしゃいました。本日最後の公演はカホンの特別ゲストを迎えてのステージとなります。どうぞ心ゆくまでご堪能ください！」

ロン団長が紳士的にお辞儀をすると、周りからは拍手が送られた。団長が弓を振り上げ、軽快なリズムを作り出すと同時に、周りの団員達もそれに乗せる。楽譜はないし、全てがぶつつけ本番だ。それでも音は融合し、ひとつの集合体となって周りに届いた。

普通に考えればあり得ない組み合わせの楽器たちだ。こんな楽器たちでまとまった音楽ができるのだろうかと言いたくなるが、しかし確かにそれは音楽だ。

何故こんなにも音同士が融け合い、大きな塊となって人の心を動かすのか。

それは、団員全員のココロオトが融け合っているからだ。

みんなを楽しませたい。踊って欲しい。幸せな気持ちになって欲

しい。そんなココロオトがそれぞれの聴衆に伝わり、届いているのだ。

そして私は今、そのココロオトの一部を演奏している。リズムが取れているのかわからない。この音が周りの楽器の音と調和しているのかなんてもっとわからない。

しかし、私はこの音の中で確かに伝えたいものを伝えている。届きたいものを届けている。その結果は、周りにいる聴衆や、団員達の表情を見ればわかる。私の前に鏡があるのなら一目瞭然だ。

私のココロオトをあなたに。

今ムジークタウンにあるこの広場にいる人達の心は、幸せいっぱいのココロオトで溢れているだろう。

私は今日、他では得られないものをここで得た。今まで自分をあまり好きになれなかったけれど、今日少し好きになれた。

だって、こんなココロオトを出せる心を持っているから。

音は嘘を吐かないんだよ。

（後書き）

元々音楽や楽器が好きで、音楽によって幸せになることを小説で表せないかと考えて書いた作品です。

主人公は何のとりえもないただの学生ですが、だからこそ嫌気がな
くていいのかな、なんて思ってます。

少しでも気に入られたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463u/>

ムジークタウン

2011年6月25日13時40分発行